日刊 動労千葉

83. 8. 16

No. 1418

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

—臨調・行革粉砕！　三里塚ジェット闘争勝利！—

国鉄労働運動解体のための方針（案）

＝＝屈服・裏切りと革マル引きまわしの全面化＝＝

動労第39回全国大会方針を弾劾する

われわれは、動労「本部」第三九回全国大会を迎えるにあたり、動労「本部」革マルによる動労四万組合員の〝革マル党〟づくりへの引き廻しと、わが動労千葉・国労の解体＝国鉄労働運動解体を唯一の基調にした「運動方針」を怒りをもって断罪し、その「総括・基調・方針」に断固たる批判を加え、権力・国鉄当局・臨調行革の先兵に、ますます純化した、動労「本部」革マルを打倒・一掃していこうではありませんか。

「全面屈服せよ」「もっとうまく裏切れ」と絶叫

まず情勢論のなかで「支配階級は強大であり万能である」従って、労働者は、奴隷となる以外に生きる道はないとしています。（これは革マル思想そのものだ）動労「本部」革マルは「厳しい情勢＝〝冬の時代〟だから闘えば弾圧され、潰される」として敵の合理化攻撃に屈服と裏切りを重ね自らは「働こう運動」を組合員に強要しつづけてきました。すなわち八二年、「大胆かつ卒直な対応」と総括し、八三年は「慎重かつ大胆な対応で」としているように、「慎重に大胆に裏切っていこう」といっているのです。このように、動労「本部」革マルは、支配階級に対決するどころか「労働者は完全に無力であり権力には勝てない」として、階級闘争の否定と、完全な敗北主義に転落し、逆に戦闘的労働者には、敵の先兵として襲いかかっています。

さらに、動労「本部」革マル方針のもつ最大の反労働者性は、三里塚闘争の否定であります。階級闘争にとって、不屈・非妥協・実力闘争のたたかいは原則であり、三里塚闘争こそこの頂点にあるにもかかわらず、動労「本部」革マルは一貫してこの闘いを否定し、敵対しつづけてきました。それは当然の帰結として支配階級との対決どころか、屈服・全面協力・実力闘争の否定という反動路線に純化したのであります。

革マル方針の全面化で、国鉄労働運動解体を目ざす

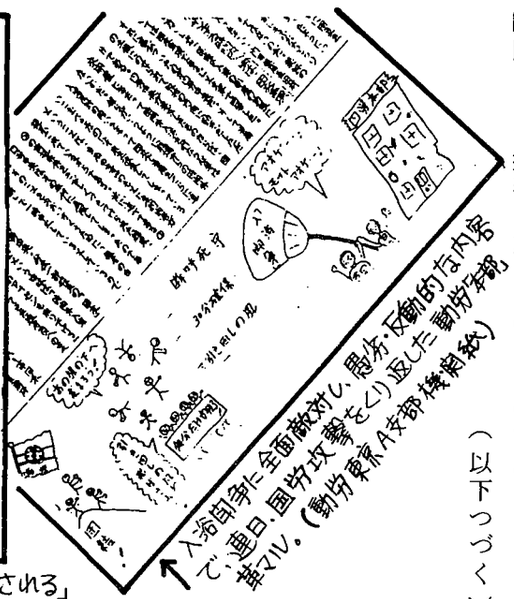
「方針」は唯々国鉄の戦闘的労働運動解体を宣言しています。国労解体については、「国労のあやまりを正し、全施労やこころざしを共にする仲間とともに強大な国鉄労働運動を追求」「大量処分攻撃で追いうちをかけられて組織内部は対立と混乱」として、「日本労働運動の新たな産報化に一挙に道をひらく運動を展開したのは、支配階級などではなくほかならぬ国労」としています。国鉄労働運動の最悪の裏切り者、動労「本部」革マルが、闘う国労に対して「挑発」「無力」「惨敗」などといいきるファシスト性を見よ。

動労千葉への、「6・12有罪判決」「6・7ゲリラ弾圧」等、権力の弾圧を全面的に賛美し、この間の『日刊動労千葉』による動労「本部」革マルの裏切り、屈服の暴露について、「反動労デマキャンペーン」としています。そうした一方で、「農民の〝一坪再共有化〟運動の主体制について尊重する」としています。

つまり、「8・8パイプライン供用開始」をもってする、政府支配階級・国鉄当局の動労千葉に対する組織破壊攻撃と一体となった「動労千葉解体」を宣言したのであります。このような革マル「方針」を路線化しようとしている、第三九回全国大会をわれわれは、絶対に許さず、粉砕するために、断固とした批判を加えていくものであります。

（以下つづく）

と労働条件を守ってきました。しかし今次国労が引きだしてしまった当局回答は、労働条件を一層改悪し権利を完全に剝奪してしまうことを具体化させてしまったということです。このような国労中央の「入浴闘争」なるものは、「国労にたいする動労の誹謗・中傷」とか「当局の攻撃は動労の態度に大きな関係がある」などと言いつつみずからの恣意的情勢分析と誤った方針によって労働条件の改悪をもたらすばかりか国鉄＝労組の攻撃を大きくよびこむ挑発者としての役割を果してしまったのです。



↑「国労から労働条件が改悪される」
「国労は挑発者だ」と絶叫する恥知らずな動労第39回全国大会方針（案）。

—全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！—